

[論文]

## 都市におけるソシアビリテの理論

早川 洋行

名古屋学院大学現代社会学部

### 要 旨

本論文は、「ソシアビリテ」の観点から、これまでの社会学研究を整理し、都市社会におけるソシアビリテ研究の今後の方向性を示すことを目的とする。まず、ソシアビリテ概念について、それが社会学から歴史学に移行し、そして回帰してきたことを説明する。次に、大衆社会におけるソシアビリテの研究には、空間論的観点をとるものと人間関係論的観点をとるものがあったことを確認する。さらに、そうしたこれまでの研究が、大衆社会を前提にしていた限界を指摘したうえで、空間論的観点と人間関係論的観点を再統合して、ポスト大衆社会におけるソシアビリテの実態を明らかにしていく必要性を主張する。

キーワード：ソシアビリテ，都市，ポスト大衆社会

## The theory of Sociabilité in the city

Hiroyuki HAYAKAWA

Faculty of Contemporary Social Studies  
Nagoya Gakuin University

## 目次

1. ソシアビリテとは何か
  - 1.1 G・ギュルヴィッチ
  - 1.2 歴史学的転回
2. プレ大衆社会におけるソシアビリテ
3. 大衆社会におけるソシアビリテ
  - 3.1 空間論的観点
    - 3.1.1 第三の空間
    - 3.1.2 サードプレイス
  - 3.2 人間関係論的観点
    - 3.2.1 若者論
    - 3.2.2 社会関係資本論
    - 3.2.3 ボランタリー・アソシエーション論
    - 3.2.4 パーソナル・ネットワーク論
4. ポスト大衆社会におけるソシアビリテという課題

## 1. ソシアビリテとは何か

### 1.1 G・ギュルヴィッチ

ソシアビリテ (Sociabilité) は、「社会的交渉」とか「社会的結合」、あるいはたんに「社交性」と訳されるフランス語である。これは、1970年代にフランスの歴史学界において注目され、その後、日本を含む、ヨーロッパの歴史を研究する人たちによって頻繁に用いられてきた。

しかし、元々は、社会学者G・ギュルヴィッチが『社会学の現代的課題』(1950年)のなかで用いたキーワードの一つであり、本稿は、この概念を歴史学から社会学に、いわば「逆輸入」することによって、社会学、とりわけ都市社会学にこれまでなかった見方を提供するとともに今後の研究課題を明らかにすることを意図している。まずギュルヴィッチがどのような文脈と意味でこの用語を使ったのかを説明するところから始めよう。

ギュルヴィッチは、社会学研究が研究対象とする類型を三つに区分する(ギュルヴィッチ1970:125-197)。①微視社会学の立場からするタイプあるいはソシアビリテの諸形態、②集団のタイプ、③全体社会のタイプである。そして、ソシアビリテの諸形態は「微視社会学の本来の対象」だとしている。彼は、これまでもソシアビリテの諸形態の分類はいくつか示されてきたとして、デュルケームの機械的連帯と有機的連帯、テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフト、サムナーの内集団と外集団などを列挙する。しかし、それらはいずれも満足できるものではない。その理由は、第一に、いくつかの異なった分類の基準を、ただ一つの基準に集約してしまう傾向があること、第二に、上下の序列体系を設定してしまうこと、第三に社会的なものについての微視的なものと巨視的なものを混同していること、そして第四に心理的なものとして解釈しようとする点である、と指摘する。そこで彼はソシアビリテを「自発的なソシアビリテ」と「組織されたソシアビリテ」に分類することを主張する。さらに自発的ソシアビリテは、部分的融合によるものと部分的対立によるものに分類される。組織されたソシアビリテは能動的一体化、能動的共同社会、能動的マスに分類される。

これらのギュルヴィッチの説明を読み取るに、彼は微視的な関係性を自発的なものか組織的なもので分けたうえで、統合的か分裂的かの二つないし三つの下位水準を設定して類型化していると言えるだろう。

まず確認しておきたいのは、ソシアビリテとは、ギュルヴィッチにとって社会的関係性を分類するための、それまでの同様の社会学研究を批判したうえでの、自分独自の社会的な「類型」であったという点である。この点については、後にA・キュヴィリエが、当時社会学の世界で盛んに行なわれた、こうした社会関係の類型化の試みを批判して、「社会的なものが限定される具体的条件を多少とも無視」する「基本的誤謬」を指摘したが、この点に踏み込むのは本稿の目的からは少し外れるのでやめておくことにする（キュヴィリエ1950：117-119）。

何より本稿の目的からして、ここで確認すべきは、ソシアビリテとは何を意味していたのかということである。われわれ社会学者は、社会学を学び始めるごく初期的段階で、デュルケームの機械的連帯と有機的連帯とか、テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトとか、サムナーの内集団と外集団とかの社会の類型を学ぶ。だから、それらを包括する上位概念を考えるという発想をもちづらいのけれども、ソシアビリテとは、これらの社会的類型を包含する言葉だった。ギュルヴィッチにとって、ソシアビリテとは、簡単に言ってしまうと、社会関係の様式だったと言ってもよい。日本においてソシアビリテ論を精力的に展開した西洋史学者である二宮宏之は、ソシアビリテを「人と人との結びあうかたち」と呼んでいるが、これはまさに的を射た表現だろう（二宮編1995：3-4）。

## 1.2 歴史学的転回

先に述べたように、ソシアビリテという概念は、やがて歴史学に導入される。二宮宏之によれば、その嚆矢はM.アギュロンである（二宮編1995：7-9）。彼は、1966年の博士論文において、アンシャンレジーム末期から19世紀なかばに至るバス＝プロヴァンス地方の濃密な人間関係を「南仏特有のソシアビリテ」として論じた。こうした歴史学者のソシアビリテへの注目は徐々に広がってゆき、ソシアビリテ研究は、その対象が、空間的にフランスのみならずドイツやイタリアにも拡大する一方で、時間的にも拡大していった。21世紀に入ると古代ギリシャ、ローマのソシアビリテに関する研究までもが現れてきている（阪本・鶴島・小野編2008）。

さて、ここで注意したいのは、元々、社会的な類型であったソシアビリテ概念が歴史学者たちによって、考察対象を指し示す概念に変わったということである。つまり、歴史学者たちは、社会的類型ではなく、まさに「人と人との結びあうかたち」として、この概念を理解したのである。

ソシアビリテをそう考えるならば、当然ながら、ギュルヴィッチ以前に、それを研究した業績も存在する。二宮宏之は、アメリカの社会学者であるN. J. スメルサーらが編集した事典（N.J. Smelser and P.B. Baltes (ed.), *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences*, vol. 21, Elsevier, Oxford, 2001）において「歴史学におけるソシアビリテ」の項目を執筆している。とても興味深いことに、彼は、そこで次のように記述している。「歴史家たちがソシアビリテという用語を採用する以前に、すでに社会学者たちがこの用語を様々に用いていた。第一にあげるべきは、ゲオルク・ジンメルであり、彼はGeselligkeit（社交＝ソシアビリテ）の概念を彼の形式社会学の鍵概念としていた」（二

宮2011：111)。このように彼は、ジンメルの『社会学の根本問題』第三章社交をソシアビリテの先行研究だと言うのである。

では、ジンメルの社交論とはどういうものだったのか。簡単に振り返っておこう。

ジンメルによれば、社交は「社会化の遊戯的形式」である。すなわち、社交においては、人々の行為の具体的な目的が欠如している。言い換えれば、人間同士の相互作用そのものが目的化しているのである。そこでは、独特のルールが存在している。たとえば、人間が個人として正面に出るようなことがあってはならない。個人の富や社会的地位、学識や名声、特別の能力や功績などが役割を果たすことがあってはならないのである。社交というのは、人々が、いわば仮面をかぶって、すべての人間が平等であるかのように、同時に、すべての人間を特別に尊敬しているかのように行う遊戯である。またそこでは、とくに男女間でのコケツトリーが大切である。それは、イエスとノーとの反復運動によってエロティズムの純粹無垢な形式となる。社交では、すべての会話に節度が求められる。話題はその内容のためではなく、活気、相互理解、共通意識のためのたんなる手段だからである。ただし、とはいえ社交と生活のリアリティを結び付けている糸は、たしかにあって、それが完全に断ち切られるときには、社交は遊戯から空しい形式の悪戯になる。生命がないのみか、生命がないのに居直った紋切型になるのである（ジンメル1979：67-92）。

こうしたジンメルの社交についての論述は、彼が日常経験していた具体的な現実について、それを「社会化の形式」として抽象化してとらえたものであった。ジンメルの社会学は、距離化という手法を用いて、現実から様々な水準についての相互作用を抽象するものだった（早川2003）。すなわち、彼が社会学の対象とした「社会化の形式」は、たとえばM・ウェーバーの「理念型」のような現実理解のための手段、純粹概念ではまったくなくて、現実に存在する様々な諸現象から帰納的に抽象される特徴であったのである。

筆者は、学生時代からジンメル社会学を研究してきた。その目からすると、歴史学者がジンメルの論述を読んで、自分たちの研究に先行する業績ととらえたことは、とてもよく理解できるし、さもありませんと思う。こうしてソシアビリテ概念は、社会学と歴史学が共有する財産となったのである。

## 2. プレ大衆社会におけるソシアビリテ

ソシアビリテの起源は、ヨーロッパの大都市において上流階級がかつて繰り広げた「社交」だったと、ひとまず認めよう。N・ルーマンは次のように述べる。「18世紀には、二つの資源だけが、個人を社交的人間として再構築するのに有用なものとして残された。すなわち、自然の再評価と社交性の再評価である。かくして感受性と友愛との新たな崇拜が宗教にとって代わった」（ルーマン2016：93）。

また、フランス文学とヨーロッパ文化の研究者である工藤庸子は、「18世紀のソシアビリテ」として、フランスの上流階級の人々が、豪華な食事や余興とともに会話を楽しんだ「サロン」の様子を、次のように生き生きと描いている。

暖炉の前にはテーブルを囲む一団がおり、窓際には立って語り合う男たち、別室でトランプに興じる男女もいる。正餐と夜食のあいだの時間には、入念な準備や贅沢な道具立てを鑑賞しながらコーヒーやイギリス風の紅茶を味わったりもする。音楽演奏については、その家の令嬢がクラヴサンの伴奏で歌を披露することもあれば、プロをまじえた室内楽に來客が耳を傾けることもある。お芝居の上演や、舞踏や、あるいは話題作の朗読などが予告され、大勢の客で賑わう夕べもあるだろうし、内輪の者だけが滞在する別荘のサロンなどであれば、男たちにまじって若い女性たちが静かに絵を描いたり、刺繍をしたり、本を開いたりということもあったらしい<sup>1)</sup>。

(工藤2018 : 31-32)

その他彼女の述べるところから、筆者が注目した点を列挙しておこう。①当時サロンの主宰者は、かなりの経済的豊かさをもつ者に限られていた。②サロンへの出入りは紹介者の口添えが必要だった。したがって、サロンはカフェと異なり、万人に開かれた「公共圏」でもなく、外界から遮断された「親密圏」でもなかった。③サロンには思想信条において同質性は存在せず、むしろ異質な人々が集った。④大方の傾向として女性（サロニエール）が主宰したが、変種は様々に存在した。ただし、女人禁制のサロンはありえなかった。

われわれ社会学者がよく知っているジンメル<sup>2)</sup>の社交論は、19世紀のドイツを舞台にしたものだが、彼の考察した社交の姿は、ここで述べられている18世紀フランスのサロンの情景と何ら矛盾しない。そして、先のルーマンの言葉も踏まえると、こうした社交の様式は、フランスのみならずヨーロッパの文化として、かなり一般化していたのではなからうか。

さて、歴史が進むにつれ、こうした特権階級の人々が作り出すソシアビリテは徐々に衰退していったと言ってよいだろう。では、近代社会におけるソシアビリテはどのような姿をとったのであろうか。

この問題を考えるうえで、工藤庸子が、「サロン」salonという言葉は、もともと広大な邸宅の応接用の一角を指す日常的な語彙であり、18世紀の新しい「ソシアビリテ」*sociabilité*の様式を暗示する語彙として使われたのは1794年が初出だとして、「場所なのか、人間関係なのか。肝心なところで混乱」が起きていると指摘していることは、極めて重要である（工藤2018 : x）。

なぜなら、近代社会におけるソシアビリテを考える場合、場所、すなわち空間論的観点からアプローチするベクトルと、それとは違って人間関係論的観点からアプローチするベクトルが可能だからである<sup>2)</sup>。その後の研究は、この点で分裂した。まず、空間論的観点から論じよう。

### 3. 大衆社会におけるソシアビリテ

#### 3.1 空間論的観点

##### 3.1.1 第三の空間

サロンは、カフェと異なって万人に開かれた「公共圏」ではなく、外界から遮断された「親密圏」でもなかった。この工藤庸子の指摘に注目したときに、思い出すのは、都市社会学者である磯村英一が、かつて展開した第三空間論である。彼は次のように述べた。

これまで都市とは、人口・住民・世帯・地域という指標でとらえられてきた。しかし、都市に人口は定住するが、じっと動かないでいるわけではない。封建時代でも「都市」といった景観・地域・構造はあったが、人間はあまり住居から離れなかった。また動くことも制限までされた。しかし、現代の都市は、「職住分離」が原則になり移動することも完全に自由である。

私は居住を第一の空間、職場を第二の空間と名付けた。しかし、都市の人間は、この二つの空間の移動のなかで、当然「第三の空間」を形成する。歩行しているとき、交通機関を利用するとき、そして買物・娯楽などを行っているとき、いずれも家庭や職場から離れている。その点で、乗客・顧客・観客といった「客」という言葉が生まれている状態は、都市現象の特徴である。

私は、この第三の空間における人間を「大衆」と呼ぶことにした<sup>3)</sup>。(磯村1989a：10-11)

磯村の言う第三の空間は「盛り場」を指すと解されることもあり、たしかに磯村自身そのように述べている個所もあるが、ここでは彼の第三空間論が完成されたとされる『人間にとって都市とは何か』(1968年)で示された原理的意味を採用することにする。彼の第三空間論を理解するためには、彼が「都市の生活空間」を図示した次の図がわかりやすいだろう。(磯村1989b：145)

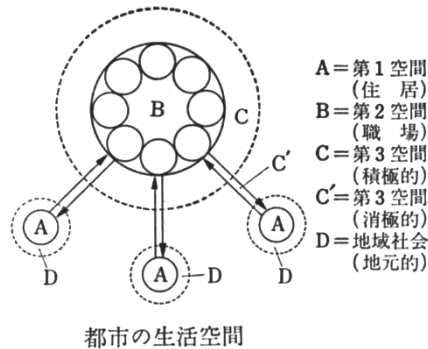


図1 磯村の第三空間論

「第三の空間」とは、住居＝「第一の空間」でなく、職場＝「第二の空間」でもない。また地元の地域社会でもない。「第三の空間」は二つあり、一つは移動途中の消極的な空間であり、もう一つは、滞留する積極的な空間である。磯村は、後者の「第三の空間」として、都市における「盛り場」を考えていた。彼は、次のようにも述べている。

第三の空間は、都市生活での支配階層が飲食や娯楽を独占している「なじみの社会」であることも事実である。銀座や道頓堀に表現される第三の空間のなかには、支配階層のみを独占的に相手にするなじみのバーやカフェ、料亭があることを忘れてはならない。そしてそのような社会が都市の繁栄の頂点に残存していることも否定できない。しかし、一般的に第三の空間は、

住民にとっては魅力ある自由な空間なのである。

(磯村1989b : 149)

彼は、「第三の空間」において、どのような人間関係が織りなされているのか、について具体的には何ら記述していないけれども、一方で何の根拠も示さないままに「都市の文化形成の一面を荷っている」として高く評価している。ただし彼は、ドヤやスラムの居住者は「第三の空間」をもたないとして、それは彼らを排除した世界、「都市生活の根本であるべき身分の自由をもたない前近代的な場」だとも述べている。この点では、日本の近代都市におけるソシアビリテが、ヨーロッパ社会の昔のサロンを引きずっているように思えるのは、とても興味深い(磯村1989b : 148-149)。つまり、ソシアビリテは、時代が変わっても、相変わらず豊かな人々の世界であることに変わりがなかったのである。

さて、こうした磯村の第三空間論は、日本の大衆社会におけるソシアビリテを空間論的な観点から見たものと判断できる。筆者は、以前、近代化によって生まれた、日本の大衆社会について詳しく論じたことがある(早川2020 : 162-190)。ここではその詳細を再度論じるのは控えるが、その要点を述べれば、少なくとも日本における大衆社会が、性別年齢別分断社会であったということである。

すなわち、近代社会は産業化の過程で男性を会社へ、女性を家庭へ、子どもを学校へ囲い込んだ。その結果、男性は「仕事」、女性は「暮らし」、子どもは「学び」をもっぱらすることが本分とされた。また、高齢者は地域社会で「いこい」、受験というハードルを越えた若者は街で「あそび」を楽しむという姿が一般化した。それぞれの歪んだ姿は多様に揶揄されてきたことは、多くの人の知るところだろう。

このことを踏まえて、磯村の第三空間論を評価すれば、その限界を指摘しなければならない。すなわち、磯村の言っていた「第三の空間」は、男性にとってのものに過ぎなかったという点である<sup>4)</sup>。もちろん、「第三の空間」である盛り場には、「ママ」や「おかみ」という女性がいた。しかし、彼女らは、サロニエールにかわって客である男性を接待する側であり、対等な関係性の間柄ではなかった。磯村が会社員の男性と対照的に論じるのは、「第三の空間」をもたない、ドヤやスラムに居住する男性労働者たちであり、けっして女性ではなかった。すなわち、磯村の第三の空間は、もっぱらホモセクシャルな世界であった。

表1 性別年齢別分断社会

主体	機能	生活空間	生態
男性	しごと	会社	会社人間 モーレッツ社員
女性	暮らし	家庭	教育ママ オバタリアン
子ども	まなび	学校	ガリ勉
若者	あそび	街	暴走族 竹の子族等
高齢者	いこい	地域	いじわる婆さん 頑固じじい

### 3.1.2 サードプレイス

もっとも、この時期の「第三の空間」が女性を排除したものであったのは、なにも日本に限ったことではなかったようだ。次に磯村とはまったく無関係に、近年、磯村の第三空間論と非常によく似た議論を展開しているR.オルデンバーグのサードプレイス論を紹介しよう。

オルデンバーグは、「サードプレイスというのは、家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所の総称である」と述べる（オルデンバーグ2013：59-60）。第一の場所を「家庭」、第二の場所を「労働環境」としていること、そして「産業化以前、第一の場所と第二の場所は一つだった。産業化は、居住地から仕事を切り離し、家庭から生産性の高い仕事を奪い去り、それを距離的にも倫理的にも精神的にも家庭生活から遠ざけた」とする点は、磯村の主張とよく似ている。しかしながら、磯村が職住分離によって生まれたものを「第三の空間」だとしているのに対して、オルデンバーグは「わたしたちがいまサードプレイスと呼ぶものは、この職住分離よりずっと前からあった」としている点で、異なっている。彼の言う「サードプレイス」は、姿かたちが変われども歴史貫通的に存在しているインフォーマルな社交場を意味している。彼は、サードプレイスには「会話のルール」が存在していると述べる。それは次のようなものであった。

- ① 自分に割り振られた時間は黙ったままにいる（なるべく長く）。
- ② ほかの人が話しているあいだは、その話に真摯に耳を傾ける。
- ③ 自分の考えを言うが、他人の感情を害さないように気をつける。
- ④ 誰もが関心をもつ話題でないものは避ける。
- ⑤ 自分の個人的なことは極力話さず、そこに集った人たちについて語る。
- ⑥ 説教をしない。
- ⑦ ほかの人に聴き取れる範囲のなるべく低い声で話す。

そして、彼は言う。「サードプレイスでは、そこに集った誰からも同じように話が引き出される。鋭い機知に富む人でさえ、会話の中心を占めるのは慎まなければならない」（オルデンバーグ2013：76）。こうした指摘は、ジンメルが社交論で論じていたことと多くが重なりあう。

しかし、彼が描くサードプレイスのソシアビリテとジンメルのそれとが、決定的に違うことが一つあった。それは、オルデンバーグの言うサードプレイスが、具体的には、ドイツ系アメリカ人のラガービール園、メインストリート、イギリスのパブ、フランスのカフェ、アメリカの居酒屋（Tavern）、古典的なコーヒーハウスなどであったが、それらのいずれもが、もっぱら男性同士の交流の場だったことである。ジンメルは、社交において男女間のコケットリーの交換を重視した。しかし、これとは違って、オルデンバーグは同性同士の交流にサードプレイスの基本的特徴を見るのである。この点について、彼は、次のように述べている。

性別分離はサードプレイスが生まれた主要因であり、今なおサードプレイスがもたらす魅力



と恩恵の多くの根拠になっている。中世ヨーロッパでは、既婚女性がたいてい洗濯場集まり、その夫たちは酒場集まった。一世紀前のニューヨーク市では、労働者が地元の居酒屋集まった。いっぽうで、その妻たちは玄関前の階段集まっておしゃべりをした。床屋が男たちの社交場であるように、美容院は女たちの社交場であるにちがいない。

(オルデンバーグ2013: 366-367)

さて、磯村にオルデンバーグのようなジェンダー論的視点があったならば、彼は、女性たちの「第三の空間」として、日本においてどのような場所を指摘しただろうか。商店街や百貨店、あるいは趣味の稽古ごとの教室だったのだろうか。ここでは、そのことは脇におくけれども、両者が「第三の空間」「サードプレイス」を同性の者たちが作り出す交際空間としてとらえていたこと、これが大衆社会に生きていた磯村英一とR.オルデンバーグの限界であったことを確認しておきたい。

## 3.2 人間関係論的観点

### 3.2.1 若者論

次に人間関係論的観点からの、これまでの社会学的ソシアビリテ研究を振り返っておこう。まず初めにあげられるのは、都市の若者に関する実証的な研究がある。よく知られたW. F. ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』は、アメリカのイースタンシティの中心地にあるスラム街、コナヴィルについてのコミュニティ研究とみなされがちだが、筆者には、むしろそこにおけるイタリア系若者たちのソシアビリテの研究のように思われる。そう考えなければ、細々とした彼ら同士のやりとり、たとえば、彼らのボウリング試合の結果について論じる意味を見出すことはできないだろう。

また同様に、教育社会学の業績として名高いP. ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』も、よく言われているように、イギリスのハマータウンにおける「落ちこぼれ」の若者たちが、労働者としての階級文化を再生産していることを明らかにした業績であるのは事実だけれども、それはまた、そうした若者たち相互のソシアビリテを論じたものとみなしうる。

さらに、同様な研究は日本にもある。佐藤郁哉の『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』は、人類学と社会学が交差した地点に生まれた珠玉の作品と言ってよいと思うが、それは暴走族の若者たちの「仲間（ツレ）」との社交のありさまを、生き生きと描き出している。

ただし、これらの若者についてのソシアビリテ研究は、そのいずれもが男性同士のソシアビリテに限られていたことを指摘しておくことは大切だろう。この時期の若者論は、ここであげた三つの研究業績に止まらないことであったが、一様に男性若者のソシアビリテ研究であったという限界を有していた。このことは、深く反省されてよいことのように思われる。

### 3.2.2 社会関係資本論

第二に、社会関係資本論がある。R. D. パットナムの『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』が出版されて以来、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）をめぐる多様な研究が一気に拡大した<sup>5)</sup>。この書は、同じボウリング場で知り合った二人のアメリカ人、ジョン・ランバートと

アンディ・ボシュマのエピソードから始まる。ランバートは64歳の黒人、ボシュマ33歳の白人だった。ボシュマは、ランバートが腎臓移植を三年間待機していることを知って、自らの腎臓の提供を申し出た。彼はこういう関係性を高く評価する一方で、最近のアメリカ社会を深く憂慮している。パットナムは言う。「われわれ米国人は、互いを再び結び付け合わなければならない。本書のシンプルな主張はこの点にある」(パットナム2006:28)。

パットナムは、「社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である」と述べているが、これはまさにソシアビリティへの注目と言ってよいだろう(パットナム2006:14)。ただし、彼以降の社会関係資本論は、ソシアビリティを「資本」という経済学的視点でとらえる傾向が極めて強い。資本は価値を生み出す母体であり、「役立つもの」という暗黙の前提を含んでいる。それゆえ、異なる集団を橋渡しする「橋渡し型の社会関係資本」と集団を結束させる「結束型の社会関係資本」という機能類型ばかりが注目されがちであるが、パットナム自身の論述を注意深く読むならば、彼はより幅広い現象を視野に入れていることがわかる<sup>6)</sup>。この点は、あらためて後述することにした。

### 3.2.3 ボランタリー・アソシエーション論

さて、第三の議論として、日本の都市社会学に目を向けてみよう。まず戦後の都市社会学を振り返ると、1980年代に佐藤慶幸と越智昇の二人を中心にして研究されたボランタリー・アソシエーション論をあげることができる。ギュルヴィッチは、ソシアビリティを自発的なものと組織的なものに分類したが、二人がいずれも注目したボランタリー・アソシエーションは、まさに自発的なソシアビリティだったと言ってよい。ただし、二人がボランタリー・アソシエーションの対抗軸として想定していた「組織されたソシアビリティ」は、まったく異なっていたのではなからうか。

佐藤が対抗軸として措定したのは、職場の官僚制だった。彼は、硬直化した官僚制組織とは異なる原理を、地域社会におけるボランタリー・アソシエーションに見て、やがて生活クラブ生協の「女性たちの生活者運動」研究へ突き進んでいった。一方、越智がボランタリー・アソシエーションの対抗軸として措定したのは、町内会・自治会のような伝統的な地域集団だった。彼は、ボランタリー・アソシエーションがそうした伝統的地域集団からはみ出しつつ、また逆に結び付きながらも存在していることに注目したのである<sup>7)</sup>。

彼らが注目したのは、いずれも家庭でも職場でもなく、そして伝統的地域社会にもない場所としてのボランタリー・アソシエーションだった。それはまさに、磯村が「第三の空間」と呼んだものにほかならなかった。また、それ以外にも両者には共通する点もあった。彼らが見ていたボランタリー・アソシエーションの担い手の多くが、女性たちだったことである。彼らの研究は、若者のソシアビリティ研究と同様に、当時日本社会に一般的だった、先に述べた性別年齢別分断社会を反映したものだ。それは、しかたがない時代の制約だったと言えよう。

### 3.2.4 パーソナル・ネットワーク論

同じく日本の都市社会学における議論であるが、第四のソシアビリティ論として学界の一大ブームに

なったのが、ボランティア・アソシエーション論の後に現れた、パーソナル・ネットワーク論である。その代表的なものとしては、大谷信介著『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』（1995年）、松本康編『増殖するネットワーク』（1995年）、森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』（2000年）などがある。

ちなみに、日本社会学会の社会学文献情報データベースで「都市 ネットワーク」のキーワードで検索してみると221件もの数がヒットする（2022年9月確認）。そして、それらは1990年代から急増しているのがわかる。その要因を知識社会的に述べれば、この時期にパソコンが急速に普及したことによって、大量の数量データについての分析が容易に行えるようになったことが背景にあると言ってよいだろう。しかし、今やこうした研究手法は個人情報についての意識変化や規制が厳しくなるにつれ難しくなっていることは、社会学研究者には、よく知られていることである。

また、こうしたパーソナル・ネットワーク論の内容については、その限界を指摘することも大切だろう。それは、こういうことである。これらの研究は、近隣ネットワーク、親族ネットワーク、友人ネットワークなどの実態と変容、そしてそれらと地域性や階層との関係について、それまで知られていなかった事実を一定程度明らかにしたことという点は、間違いなく、たしかなことである。しかしながら、その手法がもたらした数量調査であったことの限界から、知見が現実を立体的に再構成するというよりも、現実社会の一面を切り取っただけの平板な印象を与えるものであったことは否めないのではなかろうか。すなわち、それらは実証的データに基づく事実の提示であったとはいえ、あるいは、そうであったがゆえに、都市における若者論の諸研究がなされたような、都市に生きる人間の実態、ソシアビリテについての「活写」には、至らなかったと言わざるを得ない<sup>8)</sup>。

#### 4. ポスト大衆社会におけるソシアビリテという課題

筆者の見るところ日本社会は、1990年代以降、ポスト大衆社会と呼びうる新たな段階に入っている。すなわち、そのころから日本では、先に述べた性別年齢別分断が崩壊し始めるのである。その要因には、少子高齢化や知識社会化、新自由主義の伸長、あるいはグローバリゼーションといった事情がある。こうしたなかで、都市におけるソシアビリテがあらためて注目されている。

近年のコロナ禍において、政府によって、いわゆる三密（換気の悪い密閉空間・多数が集まる密集場所・間近で会話や発声をする密接場面）を避けるようにとのキャンペーンが行われた。そのことによって、逆に人々の孤立を防ぎ暮らしを守るために集まる場所が必要だという意見が強まった。アメリカの社会学者、E. クリネンバーグが2018年に刊行した、*Places for the people*は、2021年の邦訳本では『集まる場所が必要だ 孤立を防ぎ暮らしを守る「開かれた場」の社会学』と題されて出版された。この本の帯には「コロナ禍を経験した今こそ、私たちには集まる場所が必要だ」とある。

本書において、クリネンバーグは、「パットナムが『孤独なボウリング』を刊行したときに懸念していた問題は、現在も同じように蔓延しており、ある意味でもっと極端になっている」と危機感をあらわにする（クリネンバーグ2021：28）。そして、人々の孤立や孤独を防ぐためには「社会的インフラ」を整備しなければならないという。

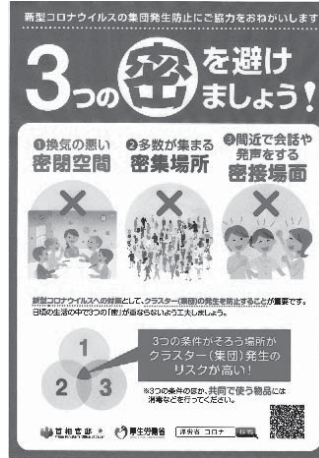


図2 「三密」ポスター

彼は、アメリカにおいて、うまく行っている事例をいくつもあげている。たとえば、図書館である。ニューヨーク市の図書館は、たんに本を読んだり、貸し出してくれたりするところではない。そこは利用者同士の交流の場にもなっていて、オープンでインクルーシブな場だと言う。

具体的には、児童フロアがあるので子連れで来た者同士が知り合えるし、高齢者にとっては「読書クラブや映画会や手芸サークル、絵画教室や音楽教室、さらには時事ニュースやコンピューターの教室などを通じて、文化に触れたり、誰かと交流したりする場所だ」と言う。もちろん、若者やホームレスの人びとも開かれている。

日本の図書館しか知らなかった筆者が驚いたのは、ニューヨークの図書館では、ティータイムを準備したり、インターネットを使って支部図書館対抗ボウリング大会を開催したりしていることである。周知のように近年の日本では、公立図書館に指定管理者制度が導入され、民間企業による「効率的」運営が推し進められつつある。この点政策的な意味において、日本とアメリカとは、図書館に対する根本的な認識がまったく異なっていると言わざるを得ない。

クリネンバーグは、図書館のみならず、託児所、学校、公園、農場、スイミングプールなどにも言及している。彼によれば、それらは、その施設としての本来の機能を果たしていればよいというのではなく、そこに集まる多様な人々が知り合い、交流するための「社会的インフラ」であるべきである。彼の、その主張は極めて明確である。「識者や政策立案者は、人々がもっとお互いの共通点を見つけて、市民的な交流に参加することが大切だとよびかけた」。しかし、それよりもむしろ「社会的インフラをきちんとデザインして、構築し、維持し、投資する」ことが重要なのである（クリネンバーグ 2021 : 9）。

こうしたクリネンバーグの主張は、ソシアビリティを豊かにするためには、「第三の空間」あるいは「サードプレイス」は、いかにあるべきかという課題を突き付けていると言ってよいだろう。

さて、日本においても最近新たな「都市におけるソシアビリティ」に関する研究が現れた。成元哲（そん うおんちよる）は、近年全国に広がって登場してきた「子ども食堂」を論じるなかで、次のよう

に述べている。

見知らぬ子どもから子育て中の母親、高齢者までが集い、家族機能のシンボルのような「食」を共にする子ども食堂。ある地域社会や社会集団にみられる人と人との結合関係、あるいは「おつきあい」の様式を、社会史の研究ではソシアビリテという。後の歴史から振り返るとき、2010年代の日本社会は、空前の盛り上がりみせる子ども食堂で、家族でないものの、共に食事をとりながら交流する「食卓をめぐる新しいソシアビリテ」が誕生した時代として記憶されるかもしれない。(成2020: 49-50)

ところで、クリネンバーグが対象とする「社会的インフラ」と成が対象とする「子ども食堂」には、注目すべき、いくつかの共通項目がある。

その一つは、彼らが見ているものが、いずれも性別や年齢が異なる人々が織りなすソシアビリテである、と言う点である。すでに述べたように、時代はすでにポスト大衆社会に入っている。今後、社会学者が研究対象とするソシアビリテの多くは、同質的な人間同士のソシアビリテではなくて、性別的にも年齢的にも異質な人間によるソシアビリテになるであろう。この点について、男性と女性が混在するソシアビリテという点では、ソシアビリテ概念の始原である18、19世紀の社交世界への回帰と言えなくもない<sup>9)</sup>。

もう一つの共通点は、図書館とか食堂とか、具体的な場所で生起するソシアビリテを問題にしている点である。これまで述べてきたように、ソシアビリテには空間論的観点と人間関係論的観点が存在する。そして、その原初にあった「サロン」とは両者が統一した言葉であったのだけれども、しかし、その後のソシアビリテ論は、二つの観点をまったく別のものとして追及してきたのではなからうか。磯村英一の第三空間論は、人間関係論的分析が希薄だったし、逆に近年一世を風靡したパーソナル・ネットワーク論には、「集まる場所」という視点が希薄だった。筆者は、こうした限界を超えて、もう一度、ソシアビリテを具体的な場所に埋め戻すべきであると考えます。

最後に、今後のソシアビリテ研究において留意すべき事柄を一つ追加しておきたい。先に、パットナムの社会関係資本論に触れた際に、「橋渡し型の社会関係資本」と集団を結束させる「結束型の社会関係資本」という機能類型ばかりが注目されがちであることを指摘しておいた。じつは彼は、社会関係資本にかかわって、もう一つの類型を提示している。それは、マッハー (macher) とシュムーザー (schmoozer) という類型である。彼はこの二つのタイプについて次のように説明している。

マッハーは、現在の出来事を追い、教会やクラブの会合に行き、ボランティアを行い、慈善寄付をし、コミュニティ事業のために働き、献血をし、新聞を読み、スピーチを行い、政治に関心を持ち、頻りに地域集会に出席する。統計学的に言えば、これらの活動のどれか一つでも行うことは、他の活動を行う確率を大きく上昇させる。コミュニティ事業に従事するのは教会に通っている可能性が高く、新聞読者はボランティアであり、クラブに通うものは政治に関心を持ち、献血者は集会に出席する可能性が高い。マッハーは、コミュニティにおける万能の

よき市民である。

シュムザーは活動的な社会生活を送っているが、マッハーとは対照的に、その関与はそれほど組織立ったり目的をもってはおらず、より自然発生的でまたフレキシブルである。彼らはディナーパーティをし、友人と出かけ、トランプで遊び、しばしばバーやナイトスポットに行き、バーベキューをし、親戚を訪ね、季節の挨拶状を送る。ここでも、何か一つを行うことは、他のことを行うことと有意に関連している。これら全てにあるのは、アレクサンダー・ポープのびつたりの表現を使えば、「魂の交歓」である。(パットナム2006:106-109)

簡単に言ってしまうと、マッハーは「フォーマルな組織に多くの時間を費やす」のに対して、シュムザーは「インフォーマルな会話や親交に多くの時間を使う」のである。パットナムは、社会関係資本を考えるうえで、シュムザーの行為に特別な注意を払う必要がある、と述べているが、これは大切な意見だと考える。シアビリテ研究は、視野をマッハーの世界のみに限ってはならず、インフォーマルな世界への注目でなければならない。

まとめれば、ポスト大衆社会におけるソシアビリテ研究は、特定の場所において、男女年齢を異にする人々が、インフォーマルに、どのような「人と人との結びあうかたち」をとっているかを明らかにするものである。

じつは筆者は、すでに都市におけるソシアビリテについての実証研究を進めている。本稿は、今後の論述のための理論的整理である。

## 注

- 1) 「クラヴサン」とはチェンバロのことである。
- 2) サードプレイスは、文字通り「場所」を意味する言葉であるが、石山(2019)は、それと「人間関係」を混同している。また、そればかりか「共同体(コミュニティ)」と「組織(オーガニゼーション)」を混同している点でも、社会学的に言って基本的な概念上の混乱が見られ、問題が多いと言わざるを得ない。
- 3) ここで、磯村が「大衆」という言葉を使っていることは注目に値する。たしかに彼が見ていたものは大衆社会の現実であった。本稿では、前期の近代社会を指して「大衆社会」と呼ぶことにする。
- 4) この点は、笠間(2021)も指摘している。また藤岡(2017)は、商店街を「第三の空間」としてとらえて、その流入者を地域社会に段階的に受け入れる機能に注目している。大衆社会において買物は主として女性の役割だったことを考えると、これは、女性にとっての「第三の空間」の意味を示唆していると言えよう。
- 5) 社会関係資本論について概観するには、稲葉(2011a)がよい。この概念を都市社会学に取り入れたものとしては、金子(2007)がある。
- 6) たとえば、チェンバースは「重要なのは、パットナムは人間を本来的に結社的な存在であるとは見ていない点である。そこでは、合理的選択理論にしたがいが、自己の利益を最大化することを目的として、私的な投資としてしか他人とつながろうとしないような、利己的な個人が想定されている」と批判しているが、これはいくらか何でも言い過ぎであろう。(チェンバース2015:156)
- 7) 筆者は、第88回日本社会学会大会(2015年)において、佐藤を招いて行われた若手研究者との対話の際に、同時期に同じくボランティア・アソシエーションを研究対象としていた越智の仕事について、どう思うのかと、

彼に尋ねたことがある。彼はこう答えた。「私は未来をみていたが、越智先生は過去をみていた」。これは、極めて的確な言葉であり、両者の研究の対照性が際立つ表現である。

- 8) 筆者はかつてこうしたパーソナル・ネットワーク論について、実証主義の弊害を示すものとして批判したことがある。(早川2020: 22-41)
- 9) 近代化が男女別のソシアビリテを生み出したことは大枠としては正しいが、そこには文化的な偏差があったことも事実だろう。こばやしあやなは、フィンランドにおける混浴の公衆サウナをサードスペースとして評価している。(こばやし2019)
- 10) 秋津元輝と渡邊拓也らは、親密圏と公共圏の継ぎ目を「中間圏」と呼び、そこをアリーナとして展開される相互作用を分析している。これは、本稿とは考察対象に対する問題関心において重なる点も多いとはいえ、ソシアビリテを空間論的観点と人間関係論的観点から分析した、ここでの記述とは、まったく違った視角からの研究である。問題なのは、彼ら自身も認めているように、中間圏の範囲が曖昧模糊としていることである。中間圏には、コミュニティもアソシエーションも、対面的な現実空間も非対面的なネット空間も入るので、考察対象が拡大する半面で、この概念を用いなければならない意味が、ひどくぼやけてしまっている。これに対して本稿は、都市社会における実態としてのソシアビリテの現代的位相を考える、という基本軸を堅持する。(秋津・渡邊編2017)

## 参考文献

- 秋津元輝・渡邊拓也編 (2017) 『せめぎ合う親密と公共 中間圏というアリーナ』京都大学学術出版会。
- 石山恒貴 (2019) 『地域とゆるくつながろう! サードプレイスと関係人口の時代』静岡新聞社。
- 磯村英一 (1989a) 『磯村英一都市論集Ⅱ』有斐閣。
- (1989b) 『磯村英一都市論集Ⅲ』有斐閣。
- 稲葉陽二 (2011a) 『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』中公新書。
- 稲葉陽二他 (2011b) 『ソーシャル・キャピタルのフロンティア その到達点と可能性』ミネルヴァ書房。
- Willis, P.E. (1981) *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*. (熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども 学校への反抗・労働への順応』ちくま学芸文庫, 1996年)
- 越智昇 (1990) 『社会形成と人間—社会学的考察』青娥書房。
- 越智昇編 (1999) 『都市化とボランティア・アソシエーションの実態に関する社会学的研究』科学研究費研究成果報告書。
- Oldenburg, R. (1989) *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*. (マイク・モラスキー解説, 忠平美幸訳『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房, 2013年)
- 笠間千浪 (2021) 「『第三圏』とジェンダー 潜在する〈対抗的ホモソーシャル圏〉」神奈川大学人文学会『人文研究』202, 2021年, pp. 1-31.
- 金子勇 (2007) 『格差不安時代のコミュニティ社会学 ソーシャル・キャピタルからの処方箋』ミネルヴァ書房。
- Cuvillier, A. (1950) *Manuel de Sociologie*. (野口隆訳『社会学』三一書房, 1964年)
- Gurvitch, G. (1950) *La vocation actuelle de la sociologie*. (寿里茂訳『現代社会学大系 第11巻 社会学の現代的課題』青木書店, 1970年)
- こばやしあやな (2019) 『公衆サウナの国フィンランド 街と人をあたためる, 古くて新しいサードプレイス』学芸出版社。

- 工藤庸子 (2018) 『政治に口出しする女はお嫌いですか?』 勁草書房。
- Klinenberg, E. (2018) *Palaces for the People: How Social Infrastructure Can Help Fight Inequality, Polarization, and the Decline of Civic Life*. (藤原朝子訳『集まる場所が必要だ 孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』 英治出版, 2021年)
- 阪本浩・鶴島博和・小野善彦編 (2008) 『ソシアビリテの歴史的諸相 古典古代と前近代ヨーロッパ』 南窓社。
- 佐藤郁哉 (1984) 『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』 新曜社。
- 佐藤慶幸 (1982) 『アソシエーションの社会学 行為論の展開』 早稲田大学出版部。  
(1995) 『女性たちの生活者運動 生活クラブを支える人びと』 マルジュ社。
- Simmel, G. (1917) *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*. (清水幾太郎訳『社会学の根本問題 個人と社会』 岩波文庫, 1979年)
- 成元哲 (2020) 「コロナ禍の子ども食堂 食卓をめぐるソシアビリテの変容」『現代思想』 48 (10), pp. 49-56.
- Chambers, D. (2006) *New Social Ties: Contemporary Connections in a Fragmented Society*. (辻大介他訳『友情化する社会—断片化のなかの新たな〈つながり〉』 岩波書店, 2015年)
- 二宮宏之編 (1995) 『結びあうかたち』 山川出版社。
- 二宮宏之 (2011) 『二宮宏之著作集3 ソシアビリテと権力の社会学史』 岩波書店。
- 早川洋行 (2003) 『ジニメルの社会学理論』 世界思想社。  
(2020) 『われわれの社会を社会学的に分析する』 ミネルヴァ書房。
- 藤岡達磨 (2017) 「他者との接触と共在の空間としての商業空間 1990年代以降の日本における商業空間論の変化に着目して」 神戸大学『21世紀倫理創成研究』 10, pp. 92-110.
- Putnam, R.D. (2000) *Bowling Alone: Revised and Updated: The Collapse and Revival of American Community* (柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房, 2006年)
- Whyte, W.F. (1943, 1993) *Street Corner Society*. (奥田道大・有里典三 訳『ストリート・コーナーソサエティ』 有斐閣)
- 松本康 (1995) 『増殖するネットワーク 21世紀の都市社会学1』 勁草書房
- 宮川公男・大守隆編 (2004) 『ソーシャル・キャピタル 現代経済社会のガバナンスの基礎』 東洋経済新報社。
- 森岡清志編 (2000) 『都市社会のパーソナル・ネットワーク』 東京大学出版会。
- Luhmann, N. (2012) *Essay on Self-reference*. (土方透・大澤善信訳『自己言及性について』 ちくま学芸文庫, 2016年)